様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 １４ 日現在

機関番号：３４１０３
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１２９６８

研究課題名（和文）近世日本の武家社会における儒学の「学問」化過程の社会的実態と歴史的意義の解明

研究課題名（英文）The Social Reality and Historical Significance of the Process of Turning Confucian Studies into "Academic Discipline" in Early Modern Japanese Samurai Society

研究代表者
浅井　雅（ASAI, Miyabi）

四日市大学・総合政策学部・特任准教授

研究者番号：８０７８２０１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、近世初期には「文芸」と捉えられ、上層庶民によって自発的に学ばれるものであった儒学が、いかに武家社会の中に受容され、浸透し、「学問」と位置付けられるに至ったか、その実態を実証的かつ総体的に跡付け、〈思想の社会史〉の立場から明らかにしようとした研究である。本研究においては、①藩主として身に付けるべき教養と儒学、②近世初期の大名の文芸ネットワークと儒学の諸藩への伝播、③藩に仕えた特殊技能者の登用に占める儒者の社会（階層）的な位置付けの変遷の3つの側面から研究を行うことで、近世日本の武家社会における儒学の「学問」化過程の社会的実態とその歴史的意義の解明を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、諸藩の藩政史料など一次史料を積極的に用いて、近世社会の中に儒学の実態を措定する社会史的研究として行った。この研究手法が、思想史の分野の新たな展開に資するものである。また、近世を一貫・継続して捉えた研究であること、藩主や儒者など複数の側面からの研究であることで、近世文化史・教育史においても新しい展望が開けるという点が本研究の学術的意義である。
　さらに、本研究の成果により、社会的には、外来思想の日本化・「学問」化の過程として、儒学を一つのパターンとして提示でき、現代における学問・教育の在るべき姿を模索することをも期待できる。

研究成果の概要（英文）：　This study is an attempt to clarify, from the standpoint of "social history of thought" how Confucianism - which in the early modern period was regarded as "literature and arts" and studied spontaneously by the upper classes of the common people - was accepted and penetrated into samurai society, and came to be regarded as an "academic discipline". In this study, by conducting research from the three aspects - namely: (1) The Confucian studies and the education necessary to be acquired by feudal lords, (2) the literary and artistic networks of early modern feudal lords and the spread of Confucian studies to other domains, and (3) the changing social (hierarchical) status of Confucian scholars in the appointment of special skilled persons to serve their domains - I examined the clarification of the social reality and historical significance of the process of turning Confucian studies into an "academic discipline" in the samurai society of early modern Japan.

研究分野：日本思想史

キーワード：儒学の「学問」化　藩儒の社会的位置付け　儒学受容　文芸ネットワーク　藩校　藩主の学問

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近世日本には中国や朝鮮のような科挙が存在しなかったため、儒学を学ぶことによって社会的上昇が見込めるわけではなかった。したがって、近世日本の儒学は、初期には支配階層である武士よりもむしろ上層庶民によって自発的に学ばれるものであった。

しかしながら、武士同士の戦闘が停止されてから一世紀近くが経った18世紀に入る頃になると、武士が戦闘者ではなく平時の官僚という性格を帯びるようになる。これに伴い、幕府・諸藩が武力ではなく、「教化」による統治にシフトし、積極的に儒者を登用し、儒学に基づく教学政策を実行に移していく。このように、儒学は近世日本の武家社会において、徐々に「学問」化していった。

このような社会の変化に伴い、諸藩に藩校が設立されていく。その前提条件として、儒学の「学問」化過程において、儒者だけでなく藩主の側からも儒学受容が起こっているはずであるが、藩校と藩主の関係とはこれまであまり注目されることがなかった。一方で、藩校の実態については、藩によってかなりの差異があり、藩主の儒学受容が藩校の実態に大いに影響を与えているであろうと考えられる。また、この点を解明することは、近世における文化・知識・学問の有り様を広く明らかにするために必要不可欠である。

２．研究の目的

本研究では、近世文化史・教育史における新しい展開に資するため、諸藩の藩政史料などの一次史料を積極的に用いて、①藩主の儒学受容、②藩主間の文芸ネットワークと儒学の伝播、③諸藩における儒者の社会的地位の変遷を明らかにする。これによって、近世日本の武家社会において、儒学が「文芸」からどのように「学問」と変容していったか、その実態を実証的かつ総体的に跡付け、〈思想の社会史〉の立場から明らかにしようとした。これにより、従来の〈頂点的思想家〉を中心とする思想家の思想分析による研究手法では明らかにできない、社会史的研究によってのみ捉えられる思想の新しい側面を明らかにすることをも目的とし、研究を行った。

３．研究の方法

本研究では、儒者関連の資料が豊富な龍野藩（譜代・5万余石）と、儒者の史料は少ないものの、藩政と藩校の史料が豊富に残されており、龍野藩と形態の違う藩である鳥取藩（外様でありながら準親藩・32万余石）とを比較して検討を行ってきた。これは、龍野藩の藩政史料が明治期に火事によって焼失しており、儒者の視点と藩政を同時に検討できる史料が残っていないことも影響している。このような一次史料の残存状況ではあるが、両藩とも教育を重視したことによって知られている。

（1）：龍野藩に仕えた特殊技能者の登用に占める儒者の社会（階層）的な位置付けの変遷を明らかにした。

対象：『諸氏略系』全7巻・『脇坂家無足諸士略系』全10巻（共に龍野歴史文化資料館蔵）

方法：一次史料から、特殊技能者・芸能者（能楽者・茶道方・儒者・洋学者・軍師・国学者・医者・坊主など）などのキーワードによって、人物ごとにその履歴を抽出し、時期による人数や待遇について分析し、儒者の藩社会における影響力を考察する。

（2）：近世初期の大名の文芸ネットワークと儒学の諸藩への伝播の関係を明らかにした。
対象：脇坂安元（八雲軒）の日記『下館日記』及び林羅山の関係史料
方法：龍野藩脇坂家2代・脇坂安元（1584～1653）と幕府の儒者であった林羅山（1583～1657）には、近世初期に文芸上の付き合いがあったことがわかっていた。このため、双方の日記の中から文芸・芸術（和歌・連歌・能楽・謡・儒学など）に関する記事と大名同士の横の関係をはじめとする人間関係を抽出し、そこにいかに芸能者、とりわけ儒者が関わっているかを検討する。同時に、このネットワークを通じて、どのように諸藩に儒学に関する情報が伝わっていったかを考察した。
（3）：鳥取藩に仕えた特殊技能者の登用に占める儒者の社会（階層）的な位置付けの変遷を明らかにした。
対象：鳥取藩の『藩士家譜』全1606冊、『侍帳』全37冊ほか（すべて鳥取県立博物館蔵）
方法：笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』（前出）を指標として、①と同様の研究を行った。また、龍野藩の事例との比較・検討を行った。
（4）：藩主・世子の学問の実態を守役となった人々の日記により明らかにし、その中での儒学受容を明らかにした。
対象：『御用人日記写』（1～11）117冊（1661～1787）、『御用人日記』（1～9）306冊（1670～1757）（共に鳥取県立博物館蔵）（御用人の日記は幕末まで形を変えて書き継がれる。）
方法：日記の中から文芸・芸術（和歌・連歌・能楽・謡・儒学など）に関する記事を抽出し、時代により藩主として身に付けるべき教養に変遷があったかどうかを考察した。

４．研究成果

儒学についての先行研究には、著名な思想家の思想分析や動向、教育史分野における藩校の設立についての研究は数多くあるが、近世前期を含む諸藩における儒学受容について明らかにした研究は少ない。

本研究においては、諸藩の藩政史料や幕政関係史料など一次史料を積極的に用いて、近世社会の中に儒学の実態を措定する社会史的研究として研究を行った。しかもその中で、諸藩の「学問」を、藩主と儒者の両面から、しかも近世前期から一貫して捉えた。諸藩の藩校設立やその前段階の藩の教学政策については、まだまだ未解明で断片的な部分が多い。

また、価値観が多様化している現代社会にあっては、従来ならば「学問」とは捉えられてこなかったものが「学問」へと昇華していく例が数多くある。そこには時代に応じたニーズが存在する。近代においても、近世期まで身分や職業に応じて自分に必要な学習のみを行ってきた一般の人々に、学校教育の学習内容が認められるまでにはかなり時間がかかっている。「学問」は、はじめから「学問」であったのではなく、社会の中で見直され、価値付けられ、成立していくものである。このように「学問」を捉えるならば、本研究の成果により、社会的には、外来思想の日本化・「学問」化の過程として、儒学を一つのパターンとして提示することができる。また、このことにより、「学問」化の過程を体系的に整理できるという波及効果が期待できる。そして、現代における学問・教育の在るべき姿を模索することにもつながる。

具体的には、「３．研究の方法」のうち、（1）と（2）については完了できたが、（3）と（4）については史料が膨大で、コロナ禍等の影響もあり、すべての分析が当初の計画通りに満足にできたとは言い難い。しかしながら、2024年度刊行予定の著書にも本研究の成果を含めることができ、一定程度の成果は確保できていると考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 浅井雅
２．発表標題 「書評：榎本恵理『本居宣長から教育を考える 声・文字・和歌』（ぺりかん社、2023）」
３．学会等名 教育史フォーラム・京都 第51回例会、於：京都市学校歴史博物館（京都府京都市）（招待講演）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計1件

１．著者名 【共著】〔監修：藪田貫、共著者：藪田貫・仁木宏・吉川潤・北林千鶴・山形隆司・ 松本充弘・仲田侑加・浅井 雅〕	４．発行年 2020年
２．出版社 八尾市	５．総ページ数 748
３．書名 『新版 八尾市史』（近世史料編2）のうち、「第8章 八尾の学びと文化」pp.623－692を藪田貫先生と共同執筆	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Promis（神戸大学大学院 国際文化学研究科 国際文化学研究推進センター）メンバー紹介
http://web.cla.kobe-u.ac.jp/group/Promis/research_fellows/asai.html

四日市大学教員紹介
https://www.yokkaichi-u.ac.jp/faculty/images/teacher/profile/sogo/Asai.webp

四日市大学教員教育・研究業績
chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.yokkaichi-u.ac.jp/faculty/pdf/sogo/15.Asai.pdf

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関